

[018] 総合文化学論輯表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/6796238>

出版情報：総合文化学論輯. 18, 2023-05-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies
バージョン：
権利関係：



総合文化学会活動記録 2022.11.1-2023.5.1

① 『総合文化学論輯』(ISSN 2189-0986)第 17 号刊行 2022.11.1

② 第 24 回総合文化学会(リモート)記録 2023.3.18→

第 24 回総合文化学会(リモート) シンポジウム

提題者: 岩武光宏

以下、当シンポジウムの段取りです。

開催日は下記②の日にちになります。

発表と質疑応答の流れは以下の通りです。

- ① 提題者は発表原稿をこの学会事務局のアドレスに添付送信する。
- ② この学会事務局アドレスをキーステーションとして、全会員に発表原稿を送信する。(今回は **2023 年 3 月 18 日(日)**)
- ③ 会員の有志は原稿に関する情報や意見、感想、質問などをこの学会アドレス宛、時期を決めて返信する(概ね 400 字以内ですが自由にお考え下さい。)(今回は **2023 年 3 月 25 日(日)**)
- ④ 学会事務局でそれを取りまとめ、発表者と会員に返信する。
- ⑤ 発表者はその返信の全体に対しての返事や意見、質問などをまとめ、時期を決めて事務局宛返信する。
- ⑥ 事務局は発表者の返信を会員宛送信する。
- ⑦ 会員でさらに情報や意見、感想、質問などがあれば時期を決めて事務局宛返信する。
- ⑧ 事務局はそれら意見や感想、質問などを発表者と会員に送信し、発表者はその返事を、時期を決めて返信し、事務局はそれを全員に送信する。
- ⑨ 必要に応じて⑦⑧を繰り返す。

1. (口頭発表) 2023.3.18

教育思想の淵源と「建学の精神」を論じる今日的意義

－フィールドワークの重要性について－

岩武 光宏

はじめに

近年になって高等教育についての議論は変質しつつある。その背景には、少子化が加速するなかでの構造的問題が顕在化している。たとえば、朝日新聞では、「2022年に国内で生まれた子どもの数は、統計のある1899年以降、初めて80万人を割り込むことが確実になった。厚生労働省が28日に公表した22年の人口動態統計(速報)で、外国人と、海外で生まれた日本人の子どもを含む出生数は79万9728人だった。(中略)国立社会保障・人口問題研究所の推計(17年)では、外国人を含む出生数が79万人台になるのは、33年とされていた。国内の日本人に限った出生数が77万人台になるのも、同じ33年と見込んでいた。いずれも想定より11年早く少子化が進んだことになる」(2023年2月28日付)と報じているように、わが国の少子化は急速に進みつつあるといえよう。この発表では、その原因や政策を論じるのでなく、あくまで高等教育を対象として。大学史(建学のダイナミズム)を論じる意義と方法論を提起する。

文部科学省「学校基本調査」によれば、2021年の大学進学率は54.9%である。国公立大学定員を現在と同じ約62万人と仮定すれば、18歳人口が80万人を割る時代には、単純計算で大学進学率80%を超えなければ、定員充足はおぼつかないであろう。大学進学率80%については様々な時代的変数がくわわることになるだろう。もし、この水準に達しない場合は、現存する大学の存立は危うくなる。この種の議論は30年前(1992年のピーク時)から続いているものの、「喉元過ぎれば熱さを忘れる」的な傾向が支配的である。すなわち近視眼的な対応(単年度で完結する議論)に終始しているのが実情ではないだろうか。それは18歳人口の漸減傾向にもかかわらず、大学の新設、学部学科の増設は続いたが(短期大学は減少)、進学率の伸びによって(30%台から50%台へ)、その問題を概ね回避してきた(〔表1〕を参照)ことにも由来する。

他方、進学率が確実に伸び続けるとはいいきれず、予想される18歳人口の漸減傾向を見据えて、国公立大学の再編統合の動きは活性化しており、いわゆる「大学淘汰の時代」あるいは「大学合併時代」ともいうべき様相を呈している。このような背景において、各大学では生き残りをかけて、様々な施策を打ち出している。私自身が私学に身を置く立場として、この渦中の当事者ではあるものの、ある論者(拙稿[2021b])を読まれた大学教授)より筆者への『大学社会全体が「サバイバル」というような卑しい守りの掛け声に追

われる今日、むしろ日々建学する、創造的姿勢が必要かと存じます』という所感によって、なお一層の問題意識を強めた。とかくサバイバルという視点のみが強調かつ喧伝される傾向にある現下の情勢において、そもそもの「建学の精神」をどのように捉えていくのか、という問題意識を持つに至った。実際のところ、生き残りに向けた合理的な展開としての再編統合が行われる場合に、「建学の精神」との整合性をどうするのか、どのように折り合いをつけるのか、あらたな問題が浮上することが十分にあり得る。したがって、どのような起源があつての私学創成であつたのか、そのダイナミズムを整理しておくこと自体に今日的意義があるのではないかと考える。これは、いずれくるであろう「つわものどもが夢のあと」という事態に備える試みでもある。

西暦（年）	18歳人口 （人）	大学への入学者 （人）	大学進学率（%）
1955	1,682,239	132,296	7.9
1965	1,947,657	249,917	12.8
1975	1,561,360	423,942	27.2
1985	1,556,578	411,993	26.5
1990	2,005,425	492,340	24.6
1995	1,773,712	568,576	32.1
2000	1,510,994	599,655	39.7
2005	1,365,804	603,760	44.2
2010	1,215,843	619,119	50.9
2015	1,199,977	617,507	51.5
2020	1,167,348	635,003	54.4
2021	1,141,140	627,040	54.9
2022	1,121,285	635,156	56.6

〔表1〕大学進学率の推移（1955~2022）出所：文部科学省資料を基に岩武作成

すでに私は、この課題について拙稿 [2015]、[2017]、[2018]、[2019]、[2020]、[2021b] で取り組んできた。とりわけ直近では、[2021a]『教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察：大分県出身の大学創設者を事例として』、[2022]『教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察：山口県出身の大学創設者を事例として（上）』で論じたように、「新・旧システムの角逐があつた地域に知的欲求の高まりがみられ、やがてそれが建学のダイナミズムに繋がる」という私の仮説を基盤にしている。この仮説を立証していく作業は、多種多様な文献にあたることが必要不可欠である。

そのテーマの性質上、時代を遡るのはもとより、エビデンスの抽出という意味において

もフィールドワークを重視している。したがって可能な限りのフィールドワークを行うことが肝要と考える。この場合、人的なものも含んでいる。すなわちヒアリングであり、これにより得られる情報をフィールドワークに落とし込むという循環が構築される。この蓄積はエビデンスの生成に繋がり拙稿での言語化・文字化の作業へと展開していく。以上は抽象的な説明であったため、以下のより具体的な3つの事例を提示してみたい。

その前に、私が留意している5点を提示する。これは、3つの事例に共通して行ったもので、濃淡はあるものの、いずれもこれを基にアプローチしながら考察を進めた。

〔要諦〕

「教育思想の淵源」フィールドワークの要諦	
①	大学の立地条件の確認(地形的特性、周辺環境など)
②	校舎の配置および建築物の特徴(年代、建築様式など)
③	「建学の精神」に係るモニュメント(石碑、掲示物など)
④	学祖・創設者に係るモニュメント(銅像、胸像、石碑など)
⑤	キャンパス内の雰囲気を確認(掲示板、図書館、学生ホールなど)

出所：岩武考案メモ。

事例1 京都産業大学

私の仮説を立証する意味での事例として、京都産業大学は多くの示唆に富んでおり、注目した。1965年に創立された同大学は、比較的歴史が浅いにもかかわらず、戦後創立された数多くの大学のなかで質実ともに異例の発展を遂げている。具体的にいえば、経済学部と理学部の2学部収容定員1,120名からスタートしたにもかかわらず、2019年には神山キャンパスに10学部・9研究科を擁した総合大学(2022年には約15,000名の学生が集う)となっていることから明瞭である。そして、その発展とは新興大学の特色と特異な人脈および地域性を合わせ持った生成過程を如実に表すものであった。同大学は宇宙物理学者である荒木俊馬が掲げた「建学の精神」を根本理念として、人材の育成に注力し、順調な発展を遂げたのである。川合[2018]によれば、『戦前の総力戦体制の推進者人脈を、高度経済成長と国際的産業競争との時代背景下、「産学協同」の理念を通じて京都産業大学に再び結集し、日本の産業社会を担う中堅的な人材育成のために活用することにあつた』と論じているように、陸軍中野学校の創設に参画した岩畔豪雄をはじめ岸信介や星野直樹、椎名悦三郎、水野成夫、石田礼助、福田赳夫、西浦進、荒井溪吉といったかつての総力戦体制の推進者人脈が同大学の協力者となったことが大学の性格を方向付けたのであろう。

同大学に関する文献は「年史」をはじめ研究者による論文など多数があるが、これらもれなく精読した。さらに年史編纂の当事者および研究者にも直接ヒアリングの機会を得た。そのうえで、上掲の〔要諦〕を念頭に置きながら、現地に赴いた。フィールドワークを通じて分かったことも多々ある。具体的には、同大学が京都の郊外の立地という先入観

があった。すなわち風光明媚な景勝地という先入観があったものの、実際には都心から適度な距離であり、交通アクセスは不便という印象はなかった。さらに、HP やパンフレットで喧伝されているような広大なキャンパスという印象は受けなかった。その理由は現地を実際に見ることにより理解できた。つまり山の斜面を利用した段々畑のような立地であったからである。このことがどのような意味を持っているのか。創設者が何としても建学を急ぎたいという執念から、当時の京都で平坦かつある程度の広さの土地の確保は難しかったのであろう。結構な突貫工事であったことが「年史」を参照しても窺える。「建学の精神」にこだわった学部学科の配置と特徴的なカリキュラムは「年史」および「同窓会誌」他、各資料でも明瞭であり、学内にそれにちなむモニュメントや掲示が確認された。



京都産業大学本館



神山キャンパスの近代的な校舎群

1960年、1970年のふたつの角逐（安保闘争）に揺れる世相のはざま。すなわち戦後日本の高度成長期の最中に当たる1965年に創設された同大学は、その世相を反映したかのようなキャンパスの拡張過程をみる。その息づく足跡はフィールドワークなしには理解できない。創設時の建物は創設50年余を経た現在では、順次建て替えられており、創設者の思いが詰まった本館も私の2回におよぶ訪問の間に建て替えられていた（写真は旧本館）。しかし、意匠的には旧本館を継承したものとなっており、隣接する天文台と共に同大学の「建学の精神」を象徴する建築物といえよう。以上のことを踏まえて考察、そして言語化・文字化の作業に取り組んだ。拙稿〔2020〕では、いささか情緒的な面も含まれるが、以下のように述べた。

ちなみに筆者は2019年に同大学を訪問した。京都郊外に位置する神山キャンパスを隈なく回ったが、創立50年を経て開学時の建物は大部分が建て替えられていた。その最新鋭で近代的デザインの校舎群のなかであって、本館は概ね開学時の姿をとどめていた。とはいってもその文化財的な価値を見出す建築物には程遠い中途半端な古びたビルだけに、近代的校舎群との不調和には違和感もあった（筆者の主観に過ぎないことを断っておく）。しか

し、ここに同大学が「建学の精神」を堅持し、なおも発展を続ける根源的な生命力の原郷を感じざるをえなかった。そして、同大学の特異な発展を支えた人的ネットワークおよび先進的な試みは、創設に関わった先人の高邁な理想と壮大な構想力はもとより、時代背景や地域性など実に多様な要因が重畳的に構築された実践知による果実だったものとする。

事例2 東海大学

松前重義は静岡県清水市に航空科学専門学校（1943年）、続いて中野区江古田に電波科学専門学校（1944年）を設立した。これらの二校を基盤として戦後の東海大学発足へと繋がっていった。拙稿〔2021〕で論じたように、松前は傑出した人物である。

詳しくは拙稿に譲るが、松前の行跡は、無装荷ケーブルの発明、大政翼賛会での角逐、逓信省工務局長から陸軍二等兵へ強制召集。被爆調査団長、逓信院総裁、公職追放という立ち位置の変容と落差（浮沈）が激しい。戦時下とはいえ短期間での逓信省工務局長から一転して陸軍二等兵への懲罰召集という変転における葛藤と知的欲求の勃興はおよそ一般人の想像を超えたものであったはずである。すなわち落差の大きさを不動の信念によって貫き通すことで、わが国の公的軌跡における矛盾を炙り出し、その葛藤から紡ぎ出した理想を現実へ転換した。いいかえれば、松前の知的欲求を戦後日本の公的政策へと置き換えたものといえよう。さらにいえば、その知的欲求の源泉に多元性を有していたことが、のちの持続的建学への推進力となったのではないだろうか。その信念は教育事業へと発揮され、望星学塾から航空科学専門学校などを経て東海大学の創設および「建学の精神」に繋がったのである。

同大学および松前に関する文献は「年史」をはじめ研究者による論文など多数があるが、これらはもれなく精読した。くわえて年史編纂の当事者にも直接ヒアリングの機会を得た。そのうえで、2回のフィールドワークを行った。その際の留意点は前掲〔要諦〕と同様である。

前掲の京都産業大学と「科学技術の振興」という創設者の戦前戦中の体験から紡ぎ出された共通項もあるが、学風は大きく異なっている。これは創設者の戦後の立ち位置の違いによる部分が大いなのではないか。戦後、日米彼我の違いの認識という意味での共通する建学のダイナミズムはあるが、大学経営においては対照的である。各大学での「創設者について」のヒアリングによって得られた知見によれば、京都産業大学創設者の荒木俊馬は、天文学者であり科学技術に対する思い入れは深く、これを建学の精神に取り組み、それを実際のカリキュラムに反映させている。その際、岩畔豪雄などの盟友の思想・教育理念も取り入れている。また、実子（長男：荒木雄豪は情報科学者）を教授として採用したものの、創設者の強い意向で世襲などは考えなかったという。あくまで大学は学術の殿堂としての公器であるとの認識に徹していたという。現在、荒木の親族は学内にはいない。他方、東海大学創設者の松前重義は、科学者、技術官僚であり科学技術に対して、荒木同様に思

い入れは深い。同大学のカリキュラムにもそれを反映させている。また、荒木にとって岩畔のような盟友が松前の場合、山田守（建築家）がそれに相当している。荒木との違いは、政治家としての一面を持ち、ワンマン性が強い。事実、同大学は松前一族による経営が続いている。これらの創設者に関する逸話は、両大学の関係者よりヒアリングで得られた果実でもある。しかし、両大学ともに歴史が浅いものの、質実ともに異例の発展を遂げている点では共通している。ちなみに両者ともに熊本県出身という点でも共通しており、いずれ拙稿での地域性による「教育思想の淵源」で掘り下げることとしたい。

2020年のフィールドワークでは1号館をはじめキャンパスを隈なく歩いたが、草創期から1966年までの建築物の設計は山田（松前の通信省時代からの盟友）が担当したという。独特の意匠をみて、私が直感したのは、かつての旧九州厚生年金病院（北九州市八幡西区）との類似性であった。調べてみると、同じく山田の設計による建物であった。正門から長い中央通りを進むと、1号館の前に巨大な松前像があり印象的であった。

拙稿 [2020] では、以下のように述べた。



東海大学 1号館



松前重義像（湘南キャンパス）

今日の東海大学は 19 学部 75 学科・専攻・課程を擁する国内有数の巨大な総合学園に発展している。メインとなる湘南キャンパスには広大な敷地に近代的な校舎群が立ち並んでいるが、そのなかでも 1号館の独創的な意匠は同大学の性格を象徴するものであろう。すなわち「科学技術は人類の幸福のためにあるべきもの」という松前の信念を表しており、キャンパスに息づく精神性とは、物質文明と精神文明のバランス・調和をめざす大理想にほかならない。それは自ら学生に講義した「現代文明論」に凝縮されており、両文明が調和した「総合文明」の建設こそが「世界に平和と進歩をもたらす唯一の道である」とする松前精神の発露であった。科学者として広島への原爆投下後の惨状を直視した松前の胸中に去来したものは、平和への強烈な渴望であり、「敗戦デンマークの復興」にみる理想の教育への情熱であった。

事例3 上智大学

同大学へのフィールドワークは4回にもおよんでいる。ここでも前掲の〔要諦〕に則り、それを実施した。率直な印象をいえば、その立地の良さである。かつて徳川御三家の一つである尾張徳川家中屋敷であり、後年には、元陸軍大臣高島鞆之助の所有地や陸軍大将大島久直らの邸宅があった場所である。キャンパスは広くはないが、その分だけ高層化した校舎が林立している。それらに囲まれるように1号館（1932 竣工、マックス・ヒンデル設計）やSJハウス（イエズス会の修道院）などの特徴的な建築物が散見される。北門の脇には、『長崎の鐘』の永井隆博士の「永井千本桜」から枝取りをして育てた「永井千本桜」の2世が植樹されている。また現在、グラウンドになっているところは江戸城の真田堀を埋め立てた場所でもある。そもそも都内の一等地の立地には、ただならぬ歴史的背景を感じざるをえない。この背景には、建学のダイナミズムと密接な関係があると考えられる。

カトリック大学創設の構想それ自体の源流はイエズス会宣教師フランシスコ・ザビエルの志に遡る。拙稿〔2021〕では、「大航海時代、ヨーロッパは海外に雄飛し、新しい世界を植民地化する歴史の大きな躍動の中にあつた。そこには『胡椒と靈魂をもとめて』というモットーにも見られる宗教的・文化的志向もあつたが、それさえもより優れたものを与え導くという同質性の次元を越えるものではなかつた」と柳瀬、尾原の言説を敷衍して論じたように、1549（天文18）年のフランシスコ・ザビエルの鹿児島上陸は、キリスト教が日本へ初めて伝えられたエポックであつた。その際、ザビエルは日本人が理性的で知識欲が旺盛であること、また当時の足利学校や五山における高度な学問・教育の存在を知つたのである。それゆえに文化・思想の交流拠点として、ヨーロッパと同様の、とりわけパリ大学に代表される教養と学問が組織化された機関としての大学を、日本の首都（ミヤコ）に設立する志を立てたのであつた。その後のキリシタン禁制期にこの望みは断たれたかに見えたが、禁制の高札が1873（明治6）年に撤廃され、1899年（明治22）年に大日本帝国憲法が公布され信教の自由が謳われたことで状況は転換した。そして350年余りを経た1905年にローマ教皇ピオ10世は日本へ親善使節を派遣した。この使節のおもな目的は拙稿で述べたとおり「日露戦争後の極東の平和の回復を祝し、戦時中に満州その他の地域のカトリック教会が日本により保護されたことに対して、明治天皇に感謝の意を表すために行われたもの」であつた。翌年、ピオ10世は明治天皇に拝謁し桂太郎首相や小村寿太郎外務大臣をはじめとする要人と会談を重ねた親善使節オコンネル司教の報告を受けて、イエズス会に対し日本にカトリック大学の設立を要請したのである。この経緯をみるに、同大学の性格は教皇庁立大学であることから、ある種の忖度が働いたことも考えられる。

同大学創設者の場合、3人の外国人かつ異なる出身国であつたことが示しているように、世界規模の角逐をとまなうダイナミズムの縮図とみることもできる。

再び拙稿によれば、「明治日本においてカトリック教会は、旧徳川幕府の政治権力を支

援したフランスが中心となっていた。これに対して、プロテスタントはイギリス、アメリカの政治的文化的勢力を背景としていたため勢いがあり、1890（明治23）年までに37の学校法人が創立されていた」と論じたように具体的には、聖公会派のウィリアムスによる東京の立教学校（1874）、組合派の新島襄による京都の同志社（1875）、メソジスト派の耕教学舎・美以美神学校のちの東京英和学校（1883、現青山学院）、長老派のヘボン塾・ブラウン塾、ワイコフの先志学校・神田の英知予備校のちの明治学院（1887）、神戸の関西学院（1889）、大阪の桃山学院（1890）等が挙げられる。一方、カトリックの教育事業は女子では、サンモール会の雙葉（1875）、シャルトルの聖パウロ会の仏和（白百合、1881）、男子ではマリア会によって東京の暁星（1881）、長崎の海星（1891）、大阪の明星（1898）の開設をみるも、そのいずれもが初等教育として始まったものであった。以上のように近代日本におけるカトリックの教育事業はプロテスタントよりも出遅れた感があり、それらの経緯を踏まえてカトリックの高等教育への要請は強くなっていた」と論じたように、明治日本において教育機関設置を巡ってのキリスト教宗派間の角逐は、ある意味では日本の高等中等教育拡大のダイナミズムを各地で引き起こした側面を持つのではないだろうか。



上智大学1号館



ザビエル像（上智大学）

前述の親善使節について山梨〔2011〕は、「オコンネルは、桂太郎との面会時に、カトリック大学の設立計画案を持ち出して彼の意見を伺い、賛同を得たことを自伝に書いているが、その時に桂が将来のカトリック大学の運営がフランス人聖職者の独占で行われまいようにとの注文を伝えていた事実は、フランス系宣教会によって長年司牧がほぼ独占されてきた日本のカトリック教会の体制を彼が問題視していたことを示している」と指摘しているように、角逐と葛藤があったことは明瞭であろう。そもそもイエズス会は1534年にイグナティウス・デ・ロヨラとその同志たちによって創立されたカトリック教会の一修道会である。その同志のひとりであったザビエルによってキリスト教が日本へ伝えられた歴史的経緯をふまえて教皇が東京への高等教育機関設立をイエズス会に委ねたのも妥当なところ

ろと考える。つまり「建学のダイナミズム」は非連続に連続していたといえよう。その結果、1908年10月18日、ドイツ汽船、ブリントセス・アリーセで大学設立のため3人のイエズス会員が横浜に上陸した。ドイツ人、ヨゼフ・ダールマン師、フランス人のアンリ・ブシェー師、イギリス人のジェームズ・ロックリフ師であった。彼らの出身国の歴史的背景には、対立と強調を繰り返した欧州隣国間の角逐があり、フランス革命、ナポレオン戦争、普仏戦争、そしてのちの第一次世界大戦から第二次世界大戦へと繋がる複雑なものであった。まさに母国の利害とテリトリーを超えた葛藤があり、すなわちそれは波濤を越えた「大いなるもの」への執念であった。1913（大正3）年に東京紀尾井の地にヘルマン・ホフマン師を初代学長として専門学校令による上智大学（哲学科、ドイツ文学科、商科）が開学してザビエルの「都に大学を」の宿願は成就した。こうして日本初のカトリック系大学は誕生した。

1928（昭和3）年に大学令による大学（文学部、商学部）へ昇格。現在では9学部10研究科を擁する総合大学に発展している。その最大の特徴はイエズス会経営から始まったことであろう。現在では、世界に200以上の高等教育機関に広がっていることから、その教育精神が揺るぎないものであることが感知される。同大学の教育精神「他者のために、他者ととともに」（For Others, With Others）は、叡智を持つ者が持たざる者のために、その叡智を役立てるとも解釈できる。また、その精神は民族・文化・宗教・思想などの多様性を認め合うことが前提であろう。「多様性を保ちながら一致すること。つまり自身のアイデンティティを損なうことなく、他者を尊重しつつ受け入れ」ることが「叡智が世界をつなぐ」ことへ繋がると考える。イエズス会の日本での教育事業は300年近い空白期間を経ての高等教育機関の設立であったため、抑圧から湧き上がる日本人の強烈な知的欲求と、それに応える旺盛な西欧の教育精神との重畳性があり、その教育精神には欧州隣国の角逐から生成された普遍性を根幹に据えたものであった。上智大学の開校は啖啄同機であったといえよう。

まとめ

今回の3つの事例を発表したが、いずれも拙稿〔2021〕でのフィールドワークを基として論理展開するものであった。現在、当学会論輯で取り組んでいる拙稿『教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察：山口県出身の大学創設者を事例として（上）、（中）、（下）』においても同様の手法を用いている。このフィールドワークに基づく各大学関係者へのヒアリングおよび文献、各種資料などを言語化・文字化への作業へと正確に落とし込むことが肝要と考える。さらに、現地に赴いて可能な限り写真撮影（許可が必要な場所もある）することが望ましい。文献から現地へのアプローチ、そして文献に還る循環が論文への論理構成に厚みを与えることにほかならない。少子化により変革していく高等教育の議論において、大学の特色やミッションの明確化が求められることは明白であり、これ

に応える基盤こそ「建学の精神」の明瞭化であり、これこそが今日的意義に繋がる再定義と考える。

なお、この口頭発表では、諸先生による多方面からの学際的知見をご教示いただきたく、ご指導を仰ぐ次第である。

参考文献

- 学校法人京都産業大学大学史編纂室 [2001]、『学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学ー建学の心をたずねて』、学校法人京都産業大学
- 学校法人東海大学 [1992]、『図録東海大学 50 年』、東海大学出版会
- 学校法人東海大学 [1993a]、『東海大学五十年史 通史篇』、東海大学出版会
- 学校法人東海大学 [1993b]、『東海大学五十年史 部局篇』、東海大学出版会
- 学校法人東海大学学園史資料センター [2018]『東海大学湘南校舎開設 50 周年記念写真集 キャンパスに描いた夢 湘南の半世紀』、東海教育研究所
- 学校法人東海大学学園史資料センター [2012]『東海大学キャンパスものがたりNo.1～3 清水・代々木・湘南 編』、東海教育研究所
- 池井 優 [1991]、『増補 日本外交史概説』、慶應通信
- 池田憲彦 [2005]、『近代日本の大学人に見る世界認識』、自由社
- 岩武光宏 [2017]、「私立大学における〔建学の精神〕の再定義～学校法人東筑紫学園を事例として～」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 22 号、東京交通学会、pp.75-88
- 岩武光宏 [2018]、「旧制私立大学の学祖・創設者の出身地にみる地域特性についての一考察」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 23 号、東京交通学会、pp.3-18
- 岩武光宏 [2019]、「幕末維新期にみる社会変動と知的欲求」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 24 号、東京交通学会、pp.57-70
- 岩武光宏 [2020]、「戦前・戦後を貫く知的欲求に関する一考察ーA I 時代と岩畔英雄の省察ー」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 25 号、東京交通学会、pp.71-86
- 岩武光宏 [2021]、「建学のダイナミズムに関する一考察 ー角逐と葛藤の大学史ー」、『東京交通短期大学研究紀要』、第 26 号、東京交通学会、pp.97-112
- 岩武光宏 [2021]、『教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察：大分県出身の大学創設者を事例として』、『総合文化学論輯』、第 15 巻、総合文化学研究所、pp.25-41
- 岩武光宏 [2022]、『教育思想の淵源と「建学の精神」に関する一考察：山口県出身の大学創設者を事例として（上）』、『総合文化学論輯』、第 16 巻、総合文化学研究所、pp.111-127
- 上智大学史資料集編纂委員会、[1980]、『上智大学史資料集 第 1 集（1903～1913）』、ぎょうせい
- 上智大学史資料集編纂委員会、[1982]、『上智大学史資料集 第 2 集（1913～1928）』、ぎょうせい
- 上智大学史資料集編纂委員会、[1985]、『上智大学史資料集 第 3 集（1928～1948）』、ぎょうせい
- 川合全弘 [2017 a]、「一軍人の戦後ー岩畔英雄と京都産業大学ー（上）」、『産大法学』50 巻 1・2 号、pp.221-

- 川合全弘 [2017 b]、「一軍人の戦後 一岩畔豪雄と京都産業大学— (中)」、産大法学 51 卷 1 号、pp.27-43
- 川合全弘 [2018]、「京都産業大学世界問題研究所五十年外史 1966～2016」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第 33 卷、pp.1-51
- 川合全弘 [2019]、「一軍人の戦後 一岩畔豪雄と京都産業大学— (下)」、産大法学 53 卷 2 号、pp.1-74
- 川合全弘 [2021]、「科学技術の発展と人類社会の変化—就任の挨拶に代えて (1) —」、『京都産業大学世界問題研究所紀要』、第 36 卷、pp.175-176
- 「松前重義と望星学塾」編纂委員会 [1986]、『松前重義と望星学塾—その思想と行動』、東海大学出版会
- 松前重義 [1980]、『松前重義わが人生』、講談社
- 松前重義 [1986]、『私の民間外交二十年 日本対外文化協会二十年の記録』、東海大学出版会
- 溝部英章 [2017]、「本学建学の精神と法学部の使命 (1)」、『産大法学 50 卷 1・2 号』、京都産業大学法学会編、pp.257-280
- 関 眞興 [2020]、『世界史を突き動かした英仏独三国志』、ウェッジ
- 東海大学「松前重義 その国際活動」編纂委員会 [1991b]、『松前重義 その国際活動 I 付録』、東海大学出版会
- 東海大学「松前重義 その国際活動」編纂委員会 [1991a]、『松前重義 その国際活動 I』、東海大学出版会
- 東海大学「松前重義 その国際活動」編纂委員会 [1994]、『松前重義 その国際活動 II 増補特集』、東海大学出版会
- 東海大学「松前重義 その国際活動」編纂委員会 [1993]、『松前重義 その国際活動 II』、東海大学出版会
- 山梨 淳 [2011]、「二十世紀初頭における転換期の日本カトリック教会: パリ外国宣教会と日本人カトリック者の関係を通して」、『日本研究』44 卷、pp.221-304
- 柳瀬睦男 編 [1988]、『上智大学の未来像』、南窓社

写真

- 京都産業大学本館、(2019 年 8 月 30 日、岩武撮影)
- 神山キャンパスの近代的な校舎群、(2019 年 8 月 30 日、岩武撮影)
- 東海大学 1 号館、(2020 年 8 月 28 日、岩武撮影)
- 松前重義像 (湘南キャンパス)、(2020 年 8 月 28 日、岩武撮影)
- 上智大学 1 号館、(2022 年 11 月 3 日、岩武撮影)
- ザビエル像 (上智大学)、(2021 年 11 月 13 日、岩武撮影)

[IWATAKE, Mitsuhiro・拓殖大学専任職員]

[現在の研究テーマ：地域における知的欲求の軌跡]

2.岩武光宏先生のご発表に対する質問（2023.3.28）

皆様の熱心なご参加を有難うございました。皆様から次のようなご質問を賜りました。このまま皆様に公開しますが、まず、岩武様はお読みになられてお返事を当事務局あて、お送りください。そのお返事が届き次第、皆様からの次のコメントなどをお願いいたします。

壬生正博先生

岩武光宏先生へ

先生のご論考：教育思想の淵源と「建学の精神」を論じる今日的意義－フィールドワークの重要性について－を拝読させていただきました。

「建学の精神」について、私の勤務校のものは学内に掲示してありますので見かける機会があるのですが、他校の「建学の精神」のことは殆ど意識したことがございませんでしたので、その重要性を再認識することができました。

ご論考では、三大学の建学に至るまでの背景をまとめていただき、たいへん興味深い内容でした。有り難うございました。

私は海外文学（主に中世イギリス文学）の研究をしておりますので、どうしても「文献（作品）」から得られる知識が研究の主な対象になりがちですが、実際にその作品が創作された場所（国）に行ってみると、作品からでは味わえない場所の雰囲気を感じることができて、作品をより深く、また、より身近に捉えられるようになります。

左記のことはフィールドワークが目的ではございませんが、多くの作品がそれぞれの場所（地域性、時代背景なども含めて）と密接に関係しているように思いますので、先生が実践されているフィールドワークは、種々の文献を立体化（あるいは立証）する上でたいへん有益なことだと思います。

いくつかご指摘、ご教示していただきたい事がございます。

1. 他の会員からも同じ指摘があると思いますが、以下の句読点に少し違和感がございます。

○57 ページ、本文 10 行目あたり：あくまで高等教育を対象として。→あくまで高等教育を対象として、（、）の方が良いのではないのでしょうか。

○61 ページ、東海大学項 5 行目あたり：陸軍二等兵へ強制召集。被爆調査団長→陸軍二等兵へ強制召集、被爆調査団長 ここも（、）の方が良いのではないのでしょうか。

2. フィールドワークを実施するための「5つの要諦」について、この5つに絞った（あるいは、5つに至った）経緯、参考文献等がございましたら知りたいと思いました。たぶん別のご論考でご説明なさっているとは存じますが、簡単に教えていただけると幸いです。
3. 今後、フィールドワークの実施にともなって、収集した資料（情報）が増えていくと思いますが、「5つの要諦」を基に一覧表を作成していただけると比較検討しやすくなるかもしれないと感じました。また、一覧表があると文字による説明もより一層生きてくると思います。

何かご不明な点等がございましたらお知らせください。 よろしくお願い申し上げます。

壬生正博

河村しのぶ先生

岩武光宏先生

この度は、「教育思想の淵源と『建学の精神』を論じる今日的意義ーフィールドワークの重要性についてー」というタイトルでご発表していただきありがとうございます。大学の統合や閉校のニュースを聞くことの多い昨今、「建学の精神」を再考する意義に気づかせていただきました。

いくつか教えていただき点がございます。多くはわたくしの読解力の不足によるものと存じますが、ご容赦いただきますようお願い申し上げます。

1. 鍵概念の定義につきまして

「建学の精神」、「大学史」、「建学のダイナミズム」が、同義語として使用されているように感じますが、その理解で間違いはないでしょうか。何度も読み返しますうちに、これらが同義語として使用されているようであると判断いたしました。いまだに多少混乱いたします。わたくしのような門外漢である読者にも、わかりやすくしていただけるようお願いができますならば、最初にそれぞれの語の定義をしていただければ幸いです。

2. 「問いと答え」につきまして

生き残りという視点のみが強調され議論される今日の情勢において、そもそもの「建学の精神」を再考する意義の重要性には、強く共感いたします。京都産業大学、東海大学、上智大学の三校の事例も、詳細かつ独自のフィールドワークによるご研究の結果が表れていて、大変興味深く拝読いたしました。

しかし、本口頭発表の2頁第2段落5行目に書いていらっしゃる「新・旧システムの角逐があった地域に知的欲求の高まりがみられ、やがてそれが建学のダイナミズムにつながる」というご自身の仮説と、それぞれのフィールドワークのご研究結果は、現段階では、「問いとその答え」という形式にはなっていないように、わたくしは思い

ます。前述の仮定とフィールドワークがどのように、後者が前者を立証するのに役立つのかについて、ご教示いただけますでしょうか。

以上でございます。つい昨日、恵泉女子大学が学生募集を停止したというニュースもございました。今後の重要なテーマとなるこのご研究のますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。ありがとうございました。河村しのぶ

山口誠先生

2023.03.19 第24回総合文化学会リモート方式発表

- ・岩武先生の発表「教育思想の淵源と「建学の精神」を論じる今日的意義－フィールドワークの重要性について－」への感想
- ・質問者：山口誠（ヤマグチマコト・九州大学大学院人文科学府博士後期課程単位修得退学・哲学）

○ご挨拶

この度、幸運にも、岩武先生のご発表論文を拝読する機会に与り大変勉強になった。先生には大変感謝申し上げます。重ねて、このような機会を与えてくださった当学会会長の荒木先生にも大変感謝申し上げます。本稿では、ご発表に関して感想を述べているが、副題にもあるように、ご発表は、フィールドワークの重要性を強調したものであるもので、本題からは外れたものかも知れない。力量不足で申し訳ないが、何かコメント・ご教示いただけたら幸いである。

○感想

本発表は、五つの要諦に基づいたフィールドワークの下に、京都産業大学及び東海大学、上智大学の三大学に関して、各々が、荒木俊馬（京都産業大学）や松前重義（東海大学）・聖フランシスコ・ザビエル（上智大学）といった創設者の建学の精神が如何にして受け継がれてきたのかについて述べられている。其処で、特に、事例として挙げられた京都産業大学に関して、創設者の建学の精神が如何にしてこれ迄に受け継がれてきたのか・今後受け継がれていくのかについて感想を述べたい。

質問者が拝読したところ、質問者は、京都産業大学は、他の二大学とは異なり、少なくとも大学の経営的な面で、創設者の仕事を直接受け継ぐものになっていないのではないかという感想を持った。というのも、言わば大学の経営は、東海大学の場合は世襲されており、上智大学の場合も（恐らくは）キリスト教徒に限られているのに対して、（陸軍中野学校が関係しているにしても）京都産業大学の場合はそうになっていないからである（発表稿, p. 59以降）。それ故、京都産業大学に於いては、創設者の荒木の精神が、果たして、言わばダイレクトな形で受け継がれているのかが疑問に残る。たとえ、これ迄は荒木を直接知る人によって受け継がれてきたとしても、今後荒木を直接知る人がい

なくなった場合に如何にして 荒木の精神を受け継いでいくことになるのかが疑問に残った。上記から、特に、事例として挙げられた京都産業大学に関して、創設者の建学の精神が如何にしてこれ迄に受け継がれてきたのか・今後受け継がれていくのかについてコメント・ご教示願いたい。

山崎浩隆先生

たいへんお世話になっております。熊本大学教育学部音楽科教育講座の山崎浩隆です。ご無沙汰して申し訳ありません。

岩武氏の口頭発表につきまして、質問がありご連絡いたしました。

「建学の精神」を捉えるにあたり、5つの要諦が提示されていますが、なぜこの5つなのでしょう。大学においても小・中・高等学校で発行されている「周年誌」が発行されているのではないかと思います。それが含まれないのはなぜでしょうか。以上です。よろしく願いいたします。

山崎浩隆

荒木正見

大学淘汰の時代だからこそ、教育思想の淵源と「建学の精神」との関連を、我が国の各地の調査をもとに論じるという方法の中核がフィールドワークという方法であるという主張は重要であると言えます。

そして現地に赴くフィールドワークがどんなに大変な作業であることは十分理解できます。それは例示されているいくつかの大学の考察からも分かります。

ところで方法論を論じるこの発表においては、どこまでがフィールドワークの方法でどこまでがそうでない方法なのかという方法論の比較論的考察が物足りない印象を感じます。

まずご自身のフィールドワークの方法は〔要諦〕という形でまとめてありますが、そのそれぞれをまとめるに当たっての必然的な理由を、簡単に結構ですから、記して頂きたいと思います。

その場合比較対象としてのフィールドワーク以外の方法に言及しつつ差異を明確にして頂くことが必要になります。

その比較論的考察を諸例に反映しつつ分析して頂ければ分かり易くなると思います。

即ち諸例においては、フィールドワークの方法を軸としながら他の一般的な方法を補完しつつ考察されているように見えます。方法論を論じるこの発表ではその方法的考察が主軸になると思われれます。

このあたりの論理を明確にして頂ければ幸いです。

荒木正見

3. 岩武光宏先生の回答 (2023.4.1)

先生各位

このたびの当学会における私の拙い口頭発表にあたり、有益なご指摘、ご助言、ご質問を賜りましたこと、感謝に堪えません。とかく視野狭窄になりがちな私の拙稿におきまして、このような機会を得ましたことで、知的欲求の高まりを実感いたしました。いいかえれば、私の提唱する仮説そのものを自ら体現する場にもなりました。厚くお礼申し上げます。

以下に個別にご回答させていただきます。些末な内容ゆえに、なにとぞご寛恕ください。

2023年4月1日 岩武光宏

壬生正博先生

ご指摘およびご質問いただき、ありがとうございました。

1 についての回答

壬生先生のご指摘のとおりです。いずれも修正いたします。

2 についての回答

「5つの要諦」に絞った経緯ですが、当初から試行錯誤をくりかえしましたところ、これに落ち着いたというのが実態です。「建学の精神」を考察するうえで、数値化が難しいという意味では、因果関係をもとに重回帰式に分析する手法などは不向きだと考えていました。

たとえば、「建学の精神」の当該大学における浸透度を目的変数とした場合、説明変数を設定するのは難しいものがあります。しかし野心的な取り組みでもあり、検討の余地があります。その意味において現段階では、データに必要な要因を抽出するための過程としての

フィルードワークと位置付けています。そのなかで多くの関係者へのヒアリングから収斂されたものが「5つの要諦」ということになります。したがって、これ（5つに絞った理由）に関しては特に影響を受けた文献があるわけではございません。

また、壬生先生のご高見は大変参考になりました。「5つの要諦」に基づく「資料一覧表」は、いずれ作成いたします。ご指摘のように、これを整理しておくことが、今後の論旨展開にも大きな方向性を見出せると考えます。

河村しのぶ先生

貴重なご質問と温かいお言葉をいただき、ありがとうございました。

1 についての回答

「建学の精神」、「大学史」、「建学のダイナミズム」これらのキーワードには類似性があり、かつ関連性も備えていますが、その概念は大きく異なります。ここでは時間的な概念について説明することが分かりやすいと考えます。「建学の精神」とは、おもに私学の学祖・創設者が建学にあたっての目的・理念を示したものです。創立時から今日までということになります。ただし時代背景の変化にともない「再定義」を重ねていることが一般的です。すなわち、創設時の「建学の精神」が現代社会において全て適応できるわけではなく、時代に合うように変革していくことの方が自然です。これは大学の生き残りの側面もあります。

「大学史」とは、「建学の精神」の発露ともいえる媒体（通史・資料編、年表、写真集など）に記載された内容と概ね等しく、同様の時間を意味します。

「建学のダイナミズム」とは、「大学史の年表」では触れられていない淵源まで遡った時間ということになります。拙稿 [2021] において、上智大学の創設は、1913年の専門学校令による設立ですが、1549年のフランスシスコ・ザビエルの来日以前の情勢を含みます。東海大学は1942年に学園設立ですが、松前重義が内村鑑三の聖書研究会に参加した1925年頃を含みます。京都産業大学は1965年創設ですが、1940年代における荒木俊馬の言論活動や岩畔豪雄の日米交渉での彼我認識および「大戦の省察」などを含めています。

2 についての回答

仮説の「新・旧システムの角逐があった地域に知的欲求の高まりがみられ、やがてそれが建学のダイナミズムに繋がる」については、口頭発表の紙幅では、かなり要約したため、いささか不明瞭な点があったこととお詫び申し上げます。

仮説で論じた地域には、大分県、山口県などがありますが、個別の事例（大学）に当てはめた方が分かりやすいかもしれません。たとえば東海大学の場合、「松前重義の官僚生活での角逐（逋信省工務局長から陸軍二等兵へ強制召集など）が知的欲求（デンマークの教育や科学技術）の高まりとなり、東海大学の建学に繋がった」ということになります。

これを実証していくには、「大学史」はもとより松前の関係した種々の文献にあたることは必須ですが、果たして文献だけで仮説を実証したといえるのでしょうか。卑見によれば、「建学」とは数値化できないだけに、比較的、見え難いものです。それゆえ、現地および関連した地域をフィールドワークすることで、分かることが多々あります。したがって「建学のダイナミズム」を読み解くことは文献での史料のみならず、皮膚感覚というものが重要になります。なお、フィールドワークには関係者へのヒアリングの実施が前提になります。その場合、相応の人物にあたらないと効果はありません。ヒアリング技術の個人差も大きく影響すると思います。

河村先生のご指摘のように「問いとその答え」にはなっていないかもしれません。拙稿で対象地域を広げていく過程で、より精緻な手法を考案して参りたいと考えています。

山口誠先生

ご挨拶とご高見をいただき、衷心よりお礼申し上げます。

山口先生のご感想を拝読し、なるほどそういう捉え方もあるのかと感じ、大変参考になりました。私からの回答ですが、そもそも大学経営においては、その方針は連続するものではないと考えます。事実、そうなっています。たとえば郊外移転を経て、この4月に法学部を都心回帰した中央大学は経営的に方針転換しましたが、「建学の精神」は基本的に不変です。時代背景あつてのレゾンデートルの構築ですので、歴代の理事長の方針が変化していくのは当然であり、これは世襲であるとか宗教などは、あまり関係のない要素です。これに対して、「建学の精神」は、時代を超えて継承され、再定義はあるものの、基本的には連続性が求められます。京都産業大学の場合は、私の見立てでは、「戦前の満州での夢を戦後日本（高度経済成長期）に京都の地で（国家総力戦グループにより）再現したもの」でもあり、これを理解するには、1930年代から1965年の創設当時までの歴史的脈絡についての知見は不可欠です。溝部 [2017] は「建学の理念の真意が当時の人々に理解されたとは言い難いが、本学はその後、既存の大学とは異なるユニークさ（反左翼的、実学志向）が良い方向に受け取られて、着々と地歩を固めていくことができた」と説明していますが、これは当時の京都が学生運動による混乱と研究の実質停止の渦中で、実質的な教育を受けようとする学生の知的欲求と研究可能な私立大学への就職を渴望した研究者との「啖啄同時」の流れがその後の驚異的な大学発展へと繋がったことを意味しています。建学の種子は荒木俊馬の戦時下での科学技術振興のための言論活動から生まれたのは間違いありませんが、その建学の精神は、創設者荒木をはじめ岩畔豪雄（陸軍少将）、作田壮一（満州建国大学副総長）、若泉敬（国際政治学者：沖縄返還日米交渉の特使）らによって生成されています。そのキーワードを端的に言えば、「道義的精神」、「産学協同」、「愛国精神」です。戦後保守でも革新でもない第三の道（国民国家像）を模索しての建学だったといえましょう。

京都産業大学 [2001] によれば、『山の上に本館が一棟、ポツンと建っているだけの大学に、なぜ多くの志願者がやって来たのか。その問いにこたえるのはただひとつ「建学の精神」に賛同した保護者が、安心して子弟を託せると信じたからである』と創設者の回想が記されており、「建学の精神」に拘泥していることが感知されます。再び前掲 [2017] によれば、「しかし冷戦の終焉と左右対立の思想的終焉は、その中で第三の道を行くのが特質だった本学の存在意義を失わせた」と述べているように、以降は時代に合わせた「建学の精神の再定義」の必然性があつたことは確かです。

「建学の精神」の発露とは、大学が明文化して公式に制定したものだけに限りません。たとえば、その周辺に息づいている場合や学生文化によって生成されたキーワードもあります。あるいは、校歌、学歌などにその精神が謳われている場合も散見されます。

たとえば先日、私事ですが京都産業大学の卒業生（5期）の某氏より手紙をいただきま

した。その文面に氏が来賓として母校卒業式に参列した際に、学歌の一節「～全人類の幸福と平和の為にわが命捧げて惜いぬ～」を聴いて目頭が熱くなったという記述がありました。氏の胸中に去来する思いは、恩師若泉敬が命を賭して尽瘁した「沖縄返還交渉」にあったことを察しました。このようなメンタリティに接することで如実に「建学の精神」が息づいていることを感じざるを得ません。現在、同大学では、「建学の精神」に掲げられた育成すべき人材像を実現するために、その精神に則り、卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）、教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）、入学者受入れの方針（アドミッション・ポリシー）を策定しています。すなわち「建学の精神」とは、草創期の学祖たちのものだけではなく、それを体現する卒業生によって拡大再生産されるものです。現に同大学の卒業生は産業界をはじめ社会の中堅としての評価が定着しています。そのことは同時期に開設された他大学の卒業生と比較しても、かなり優勢な位置を占めていることが何よりの証左です。いずれにしても山口先生のご感想も踏まえた複眼思考的アプローチが肝要かと考えます。

参考文献

学校法人京都産業大学大学史編纂室 [2001]、『学祖 荒木俊馬先生と京都産業大学—建学の心をたずねて』、学校法人京都産業大学
溝部英章 [2017]、「本学建学の精神と法学部の使命（1）」、『産大法学 50 卷 1・2 号』、京都産業大学法学会 編、pp.257-280

山崎浩隆先生

ご質問いただき、ありがとうございました。

壬生先生への回答と重なることにはなりますが、現段階では、他の方法と比較すれば、対象の性質上、より正確な結果が得られると判断したことによります。次の段階では、アンケート実施などをもとにした重回帰分析も検討してみたいと考えています。「5つの要諦」は収斂されたもので、その前段階にヒアリングもあります。ちなみに私の場合は、年史編纂委員および発行責任者との議論のプロセスも踏んでおります。したがって山崎先生ご指摘の「周年誌」も含まれておりますことをご報告申し上げます。

荒木正見先生

いつもご指導いただき、ありがとうございます。

また、このたびのご高見とご指摘にも重ねてお礼申し上げます。

仮説を立証する方法論という意味では、試行錯誤が続いております。したがって現段階では、荒木先生のご指摘にお応えするだけの理論構築には至っておりません。

しかし、「要諦」をまとめる必然性という意味でいえば、「建学の精神」の実相は、重回帰分析などの統計学的手法は不向きであると考えました。とはいうものの、野心的な手

法を導入することで、むしろ説得性のあるエビデンスを得られる蓋然性はあると考えます。

一方で「建学のダイナミズム」の検証は煩瑣にわたるため、丹念に文献にあたることにくわえて関係する地域のフィールドワークは不可避な営為と考えます。その際、むやみやたらに巡察することは、徒労に終わる可能性が高いわけです。それゆえに「要諦」の設定は必然かつ重要だと思います。具体的にいえば、要諦①には、「大学の立地条件の確認（地形的特性、周辺環境など）」を挙げましたが、これもかなり広義を含んでおります。たとえば、京都にある仏教系大学の地形的特性、周辺環境を把握するうえで、ある人物の足跡を体感する必要を感じたため、2日間で50キロを踏破したこともありました。つまりこれは創設者の辿った思索の一部を追体験するものでもありました。

今後は、学際的な視点による方法論の構築および、その成果を拙稿と整合させながら進めて参りたいと考えております。引き続きのご指導をお願い申し上げます。

4.岩武光宏氏のご回答に対するコメント・謝辞(2023.4.10)

河村 しのぶ

岩武光宏先生

ご回答をありがとうございました。

大変興味深く、勉強させていただきました。

現在によく適した大変面白い研究テーマだと存じます。

陰ながら、先生のご研究のますますのご発展を、こころよりお祈り申し上げます。

また、ご発表や論文をご投稿されるのを楽しみにさせていただきます。

河村 しのぶ

壬生正博

岩武光宏先生

この度はご回答いただき有り難うございました。

「5つの要諦」は、先生のフィールドワークのご経験を基盤に収斂されたとのこと説明から、この要諦が先生のご研究の精髓であることを改めて認識できました。今後も文献調査

やフィールドワークを続けられて情報を蓄積していただきたいと思います。一覧表を作成する上で新たな問題点が生じてくるかもしれませんが、客観性がより如実になるのではないのでしょうか。

将来的な展望として、国内外（例えば、上智大学と海外のキリスト教圏）の建学の精神を比較検討なされると、また新たな「気づき」があるかもしれません。

今後のご発展をご期待申し上げます。

有り難うございました。

壬生正博

山口 誠

第 24 回総合文化学会リモート方式発表

・質問者の感想文に関する岩武先生の応答へのお礼

・質問者：山口 誠

○ 質問者の感想文に関する岩武先生の応答へのお礼

i) 岩武先生のご回答に対するお礼

この度は、拙い感想・質問であったにも拘らず、非常に懇切なるご回答をしていただき大変感謝申し上げます。一読したところ、質問者なりにではあるが、研究に対する先生の気魄を感じ、しばし圧倒された。

以下、分かり難いところもあるかも知れないが、先生のご回答に関する質問者なりの感想を述べたい。

ii) 先生のご回答に関する質問者なりの理解

先生に対する質問というのは、「特に、事例として挙げられた京都産業大学に関して、創設者の建学の精神が如何にしてこれ迄に受け継がれてきたのか・今後受け継がれていくのかについてコメント・ご教示願いたい」ということであった。これに対する先生のご回答を質問者なりに纏めると次のようになる。

即ち、建学の精神というのは、先ずは、創設者によるものに拘泥して引き継がれていくことになるが、後には、時代に合わせた再定義によって引き継がれていくことにもなる。京都産業大学の場合、建学の精神は、先ずは、創設者の荒木俊馬によるもの、即ち「戦前の満州での夢を戦後日本（高度経済成長期）に京都の地で（国家総力戦グループにより）再現した」「道義的精神」、「産学協同」、「愛国精神」であり、戦後保守でも革新でもない

第三の道（国民国家像）を模索してのものであった。建学の精神は、当初は、荒木の精神に拘泥して引き継がれていったが、冷戦の終焉に伴い、第三の道を模索する意義が失われた後には、その周辺や学生文化、校歌・学歌によるものも含めて、時代に合わせたもの・再定義によって引き継がれていくことになる。

iii) (できればii) を踏まえた上での) 質問者なりの所見:

以上の質問者なりの理解を踏まえた上で、恐縮ながら、この理解に関する更なる感想を述べると次のようになる。

先ず、ご回答に於いて、建学の精神は、戦後、戦後保守でも革新でもない第三の道を模索したものであることではあったが、質問者の読み込み・理解不足かも知れないが、冷戦終焉後、意義が失われてしまったその第三の道への模索に代わって、建学の精神は、如何にして時代に合わせて・再定義によって引き継がれて行ったのかということ迄は書かれていないように感じ、その時代に合わせた再定義が何なのかについて知りたいと思った。無論、建学の精神は、その周辺や学生文化、校歌・学歌にも息づいており、其処から推し量るしかないのかも知れない。

次に、ご回答に、大学経営の方針は連続するものではないものの、「建学の精神」は基本的に不変であるとあった。この点に関しては質問者も理解ができた。実は、このご回答は、質問者にとって的を射たものでもあった。というのも、質問するに当たっては、大学の経営と建学の精神は密接な関係にあるのではないかということが念頭にあったからである。無論、先生のご回答は、繰り返すように、大学経営と建学の精神に関して、前者が不連続で後者が連続したものであると述べられているのであって両者が無関係なものだと述べられているわけではない。それ故に、差し当たりは、大学の経営に連続性はないものの、建学の精神を、言わば、体現するものとして重要な関係を保っていると理解することにした。

荒木正見

ご丁寧なご回答を感謝申し上げます。

「建学の精神」の意味を探究するというテーマにおいては統計学的、量的研究は不向きであることはご意見の通りだと思います。従って、「要諦」という形で、研究の前提を提出するという事は意義があると思います。

それだけに、フィールドワークの過程で「要諦」の検証を行うことも並行していただきたいと思いました。フィールドワークの方法は、荒木自身も試みていることもあって、いわば無限に向かって研究の扉を開くという宿命がありますので、これ自体も大変だと思

ますが、今後の課題として考えて頂ければ幸いです。

全体的なご研究のテーマは個人的にも興味深く、大変意義のあることだと思しますので、根気よく継続されることをご期待申し上げます。

5.岩武光宏氏よりの謝辞 (2023.4.15)

先生各位

謝辞

当学会の口頭発表におきまして、私の拙い発表内容に対して、かくも貴重かつ有益なご高見を賜りましたこと、厚くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

ご専門をお持ちの先生方ゆえに豊かな学識と知見に基づかれていることはいまでもありませんが、その学際的見地からのご高見に私自身では気が付かなかった諸問題が洗い出されていることを痛感しました。私にとっては望外の喜びでした。とりわけ、ご指摘やご質問は実に刺激になり、大変興味深いものがございました。これこそ当学会の醍醐味といえましょう。すなわち学際的考察による知的欲求の高まりであり、「総合文化」の名に通じる知的営為だと考えます。とかく独りよがりになりがち（時には暗闇の中で格闘するような）研究活動において、一条の光が差し込んできたような高揚感もありました。先生方との往復文書は、知的欲求の発動に繋がるエールの交換であり、それ自体が「知的ダイナミズム」にほかなりません。対面での口頭発表にもメリットは多々ありますが、今回の発表方式には質の高い充実した相互交流というメリットを知ることができました。

今回のテーマとさせていただいた『教育思想の淵源と「建学の精神」を論じる今日的意義 ―フィールドワークの重要性について―』ですが、大学人にとっては多かれ少なかれ関係しています。「建学の精神」は「大学認証評価制度」が法律で義務付けられて以降、どこの大学もこれを掲げることに躍起になっています。私が指摘する「建学の精神の再定義」には、大きくは2つのタイプがあります。「歴史的な背景で部分修正せざるを得なかったもの」、「法人そのものの存続のために修正したもの」の2つです（それ以外のケースもあります）。前者と後者では、その意味が大きく異なります。ここでは詳しく述べることはできませんが、前者については、たとえば第二次世界大戦後にその存在意義を問われた大学です。実際に校名変更を余儀なくされた大学も散見されました。後者は、生き残りのための転換です（女子大から共学化など）。いずれにしても時勢もあり、この潮流は続くと考えます。ゆえにこのテーマに取り組む今日的意義を強く感じております。

ちなみに、この「再定義」という修辞について、ある大学の学長と議論になりました。そして、「建学の原点への回帰なくして再定義の議論は成り立たない」ということで一定の結論に達しましたが、検討の余地は残っていると考えます。

研究途上につき皆様のコメントに満足に対応させていただけたか自信はございませんが、今後も引き続きご高見を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

2023年4月15日 岩武光宏

③ 『総合文化学論輯』(ISSN 2189-0986)第18号刊行 2023.5.1